

中国空軍 J-16 戦闘機の開発状況

漢和防務評論 20161106 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍は、J-7B 戦闘機及び Q-5 攻撃機の後継機として、J-16 多用途戦闘機を開発中ですが、J-15 艦載機と同様に複製機としての特有の問題があり、生産が遅々として進んでいません。

ロシアの航空技術専門家によると、複製には越えなければならない技術的難関があり、それを自力で乗り越えなければ永久に本物にはならない、と指摘しています。

艦載機として中途半端な SU-33 を選択し、それを複製するとは意味が分からない、ということです。

KDR 北京 JOHN CHANG 特電：

中国航空工業の権威筋は KDR に対し次のように述べた：SU-30MK2 を手本に複製した J-16 (多用途型戦闘機) は、すでに工場での試験飛行を終了した。現在空軍が少数機を保有し、鼎新基地で試験を行っている。試験項目は相当多く、海・空軍が装備することになる、と。

J-16 は、J-7B 戦闘機及び Q-5 攻撃機の後継機であり、このことから大凡の装備機数が分かる。現在も中国空軍は、かなりの数の J-7B 及び Q-5 を就役させている。” 次の段階は、J-16 の電子戦型、電子妨害型機、電子偵察型機等々の開発がある” と消息筋は述べた。

中国は 1990 年代に KH-31P 型対レーダー空対地、空対艦ミサイルを獲得した。中国の YJ-91 と称する対レーダーミサイルはこれを見本に開発したものであり、今後 J-16 に搭載されるかどうか注意すべきである。

J-16 に搭載されるエンジンは国産の”太行” エンジンである。

J-16 の開発は中国が SU-30MK2 を獲得してから開始されたものであるが、生産速度は依然として極めて緩慢である。その実際上の理由は、J-15 と同じである。複製の過程で、部品の標準化、シリーズ化、生産の規格化に時間がかかっているからである。

中国海軍は、J-16 と YJ-12 シリーズ超音速対艦ミサイルを組み合わせることで、海軍航空部隊の対艦攻撃能力を大幅に高めようとしている可能性がある。

現在は搭載に最適な機体がないため、YJ-12 は H-6M 型爆撃機に携行させている。

これは西側媒体が初めて獲得した J-16 の鼎新基地への展開、戦術訓練、試験の情報である。この動向から中国空軍作戦部隊の若干の任務の変化を見ることができる。5 年前は、通常の下で最初に新型機を装備する部隊は、滄州の戦術飛行訓練センターであった。しかしこの一、二年で、J-10B や J-16 等の新型機はまず最初に鼎新基地に配分され、その後その他の作戦基地に配分されている。このことから、過去に滄州基地が受け持っていた戦術訓練の一部を、鼎新基地が引き受けていると見ることができる。このようにした主な理由は：①滄州は沿海に近すぎ、日米による監視が容易であること。②滄州の空域は狭く、経済発達地区に接近し過ぎ、新型戦闘機の訓練には不利であること。一方の鼎新基地は北西地区にあり、これらの問題が存在しない。このように分析すると、次の段階での瀋陽航空機会社の重点生産機種は J-16、J-11D (J-20 か) 及び中国版 SU-35 となる。現在は、依然として技術を蓄積する時期にあり、いまだ生産のピークとなる時期には達していない。

KDR の特約航空評論家で、ロシアの権威ある航空技術専門家でもある GORDON YEFIM 氏は、この状況について KDR に対し、次のように述べた：航空機の複製技術に関しては、中国人は相当優れている。しかしある努力指向の方向は必ずしも正しくない。例えば、SU-33 を複製した J-15 である。SU-33 は、ロシアでは過渡的な機体である。現在ロシア海軍は艦載機として MIG-29K を使い始めている。この機体は初期型に比べ近代化が進んでいる。なぜ MIG に換装したのか、と？それにはわけがある。しかし中国は、積極的に J-15 を複製し生産している。なぜ生産が遅々として進まないのか？

技術的難所を真に突破し、自らの処理方式で消化できなければ、運用は相当困難であり、時間もかかる。例えば J-15 の主翼の設計は、正に運用中に困難な問題に直面するであろう、と。

これが中国人が SU-27 の派生型を複製し始めてから、生産速度が向上しない理由である。GORDON YEFIM 氏は世界でも公認されたロシア戦闘機の技術評論家である。

以上